

としま

「第72回“社会を明るくする運動”」特別号の構成
1面…作文コンテスト表彰式
1・2・3・4面…作文コンテスト受賞作品

“社会を明るくする運動”

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

7月3日(日)中央大会「区民のつどい」を開催しました!



作文コンテスト表彰式(小学生の部)



作文コンテスト表彰式(中学生の部)

★ ★ 推進委員長賞

気持ち良い学校生活



豊成小学校 6年生
ザヒル デイナーさん

僕は、学校でみんなが仲良く、楽しく過ごせるために、どうしたら良いかを考えました。

それは僕にとって学校での毎日がとても大切だからです。

僕は1年生の時、初めてマレーシアから日本に来て、豊成小学校に入学しました。その時は、全く日本語がわかりませんでした。

その時、クラスの中で仲間外れにされたように感じたことが何回かありました。サッカーに入れてもらえないことがありました。どうしてそんなことをするのかと思ったり、僕が外国人だからかな、と思ったりしました。

その経験から、僕は誰もそんな気持ちにならなくてよいように、最強の方法を考えました。

一つ目は、毎日きちんとあいさつをすることです。「おはようございます。」「また明日」と誰にでも大きな声で言うことを大切にします。

二つ目は、何かしてもらったら必ず友

達や先生の目を見て、「ありがとう」と言うことです。

三つ目は、悪い言葉を使わないことです。たとえば、「バカ」や「死ね」、「アホ」などです。

四つ目は、お互い良い所をほめ合うようにします。たとえば、「やさしいね」、「すごいね」、「かっこいいね」などです。

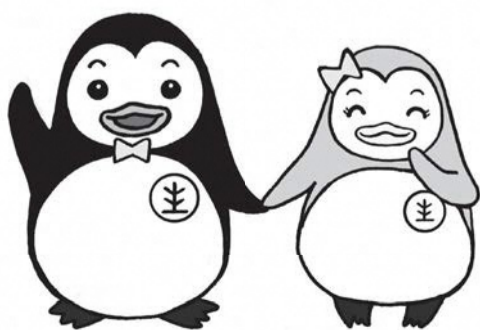
この四つを努力して続ければ、誰もいやな気持ちにならないと思います。それが僕の考えた最強の方法です。

毎日、学校が楽しければ、勉強や遊びが楽しくできます。日本人もその他の国からの同級生もみんな仲良くできると思っています。

僕にとって「社会を良くする」ということは、いじめや差別のない学校生活をみんなでも実現することです。

僕は日本の学校が好きです。特に、みんなでもグループで話し合うことが好きです。

これからもみんなでもいろいろ考えて、仲良く学校生活をしていきたいです。



★ ★ 推進委員長賞

「社会を明るくしたい」



明豊中学校 2年生
ひょうどう あんじゅ
兵藤 杏樹さん

「いつでも会えるのだから、また今度しよう。」
今、私はそう思っていたことを後悔している。当たり前と思っていた生活は、新型コロナウイルス感染症が世界中に広がったことによって、じわじわと制限されていった。

感染を防ぐために、私達は、人と人との間に、目に見える距離を取るようになった。

世界中の人が感染症と闘っている間に、祖父母は、難病のためそれぞれ入院生活を送るようになっていた。インターネットを使ったオンライン面会の画面の祖父母は、弱々しく、不思議そうに前方を見つめてくる。

祖父母の近況を聞いたり、学校での出来事を報告したりするが、面会が終わって黒くなった画面には、祖父母との隔たりが映し出されているようで、悲しい気持ちになる。

二人共、再び自宅生活を送ることは難しいそうだった。

時間を巻き戻すことができれば、と思う。

小学生の時、私は学校の七夕の短冊に「友だちがいっぱいほしい」と書いた。

みんな、グループに入っていて楽しそうだった。しかし、グループで人の悪口を言ったり、意地悪をする人たちのことが、私は苦手だった。

何故そんなことをするのか。けれどもその人達には友達がいって、いつも楽しそうだった。

友だちとはなんなのかな。

私は、その違和感が喉の奥に引っかかっていた。生徒が大勢いる教室の中で、自分は遠い所にいるような感覚だった。

中学生になって、変化が訪れた。

ある日の同級生の発言に、私は、全く異なる感想を持った。それを言ったら、その同級生は気を悪くするだろうか。

私は、思い切って同級生に言ってみた。「私はこういう風に思う。」

二人が対立したようにも思えたが、同級生とは、今も意見を出し合いながら毎日楽しく過ごしている。

お互い思うことを素直に言い合えたから、良かった。

たのだろうか。それだけではない。相手を理解したいと思う気持ちがあったから、意見が違っても、そういう考え方もあるのかと思えたのだろう。

意見が合うと、仲間ができたような嬉しさが生まれ、少数意見だと、孤独を感じ、不安にもなる。

しかし、少数でも、そこに意思の疎通が生まれていたら、どうだろう。

短冊を書いた当時、通知表に担任の先生が書いてくださった「友人は数だけではありません。一人一人との関係をより密にしていってほしいと思います」という言葉を、今の私は、しっかりと理解できる。

価値観や意見が異なっても、互いの考えを知り、認め、信頼関係を築くことはできるのだ、と体感した瞬間だった。

そして、今の私は、孤独ではない。心が強くなったと思う。

私達の暮らしには、人々が集まって生活を営む様々な集団の場が存在する。家族、学校、職場、国、世界、規模は違っても、人が集うところは、立派な社会である。

そこに、孤独に陥っているひとはいないだろうか。不安な気持ちを抱えている人はいないだろうか。

今、世界では、感染症と闘う人々、戦争や内戦で苦しんでいる人々がたくさんいる。社会は決して明るくはない状況といえる。

私達は、他者を気に掛ける意欲を失くしてはならない。

そして、互いへの感謝の気持ちも忘れてはならないと思う。

今一番伝えたい相手に、わかりやすく伝えよう。

昨年、念願だった宿泊行事に行くことができた。様々な行事が中止や延期になった中での実現だったので、とてもという言葉が物足りない位に嬉しかった。

その夜、宿泊所でルームメイトになった同級生と距離を保ちながらひとしきりはしゃいだ後、布団に入る時に、お互い自然と言葉が出た。「生まれてきてくれてありがとう。」

心が明るくなった。

小学生の部

1,468
作品

作文コンテスト

★ ★
常任委員長賞

「思いやり」が作る明るい社会

池袋第三小学校 6年生
すずき さら
鈴木 紗良さん

近年、中・高生の自殺に関するニュースが増えてきていると感じる。自殺というのは、かけがえのない命、生きる権利を自ら放棄してしまうことだ。私は、自殺という選択をせざるを得ないまで追いつめられている人がいるという現状を必ず変えていく必要があると思う。

中・高生の自殺の原因の多くは、「いじめ」ではないだろうか。いじめは子供の中で最も重い犯罪だ。では、この犯罪をなくすためには何が大切なのだろうか。私は「他者を思いやる心」が大切だと考える。そう考えるのには、私自身、友達の「他者を思いやる心」に救われた経験があるからだ。

5年の冬だった。学校は毎日非常に楽しく、充実しているものだった。それをこわしたのが、「うわさ」だった。私とある子についてあることないことが一気に広がった。うわさをうのみにした人たちがからかってきたり、さらに大きく話をふくらませて人に伝えたり、中には私を悪く言う人もいた。「いじめ」ではない。友達が自分のところから離れたわけでもない。でも、うわさが広まっていることを知ったとき、とても孤独な気

持ちになった。このとき、「うわさ」のこわさを初めて知り、うわさを早く消さないと、とあせりもがいている自分がいた。そんなとき、ある友達からのメッセージで私はしずんでいた心が軽くなった。「紗良、大丈夫？紗良は何も悪くないからうわさなんて気にしないでね。」メッセージにはそう書いてあった。短い文章だ。でも私は、このメッセージに心が救われた。「紗良は何も悪くない」という言葉は、「堂々としていいんだ。」と思わせてくれた。そして、友達が寄り添ってくれたことが心の支えになり、一人じゃないと思うことができた。それからうわさを気にせず堂々としていたので、周りから何か言われることもなくなり、うわさは自然に消えた。私はこの経験で気づいたことがある。それは、自分が孤独なとき、つらいときに寄り添ってくれる人が一人でもいるだけで、心はとても軽くなるということだ。

いじめは、絶対にやってはいけない犯罪だ。でも、実際いじめをゼロにするのはむずかしいかもしれない。大切なのは、いじめが起きてしまったときの周りの対応だと思う。いじめら

れている人は孤独で、とてもきずついている。そんなときにだれか一人でもそっと寄り添ってあげることができたなら、その人は何倍も心が救われるはずだ。なぜなら人にはだれでも、心に温かみがあるからだ。その温かみを、心に傷を負った人が凍えている人に分けてあげる。これが思いやりだ。こうして社会のすべての人を温かくできれば社会は明るくなるのではないだろうか。

今、ロシアとウクライナの戦争がニュースで多く取り上げられている。おびえているウクライナの人々を見ると、世界はもっと何かできないのだろうかと感じてしまうが、実際支援物資や難民の受け入れ、寄付など各国の様々な思いやりの行動が、ウクライナの人々を救っているということを知り、うれしくなった。でもまだ、心が凍えている人がいるのは事実で、これからはもっと一人一人でできることを様々な立場で考え、行動につなげていく必要があると思う。そうして戦争が早く終わり、ウクライナの人々に笑顔が戻ってくる日を、私は待っている。

私自身はこの社会に生きる一人として、常に思いやりのある行動をし、自分の持つ温かさを人に分けてあげられる人になりたい。またこの社会が、思いやりであふれる温かい社会になることを願う。

★ ★
優秀賞

「あいさつを通じた明るい社会づくり」

豊成小学校 6年生
たかはし あきな
高橋 暁奈さん

私は5才の頃から囲碁をやっています。

囲碁では、試合を始める前に、「お願いします」と姿勢を正してあいさつをします。また、終わった後は、どんな時でも必ず「ありがとうございました」と心を込めてあいさつをします。負けて悔しい時は、なんで負けたのだろう、どこがいけなかったのだろうと落ち込んで、あいさつをする気持ちにはなれません。ですが、1時間以上にわたって試合をし、全力を出し合った相手に対し、「ありがとう」と感謝を伝えることは、囲碁という競技のマナーです。

囲碁は、最後に自分の陣地が多い方が勝ちになる競技です。試合中は、相手を倒すという思いを強く持ち、戦っています。最後に、「ありがとう」とあいさつをすることで、「お互いまたがんばろうね」と気持ちを切りかえることができます。あいさつをすることで、相手が「敵」から「共に切磋琢磨できる仲間」になります。

小さい頃から囲碁をやっていた私は、このような経験を通じて、あいさつは「仲間」を増やす最高の言葉だと思っています。だから私は、囲碁以外の場所でも、積極的にあいさつをするように心がけています。

例えば、バスから降りる時、後方のドアではなく、前方のドアから降りるようにしています。なぜなら、運転手さんに、安全に運転してくれた感謝の気持ちを伝えるためです。「ありがとうございました」と元気な声であいさつをして、バスを降ります。

他にも、通学路の公園で工事をしているおじさんに、「おはようございます」と明るい声であいさつをします。最初は、少し暗い雰囲気でも、なかなかあいさつを返してくれませんでした。ある日からあいさつを返してくれるようになりました。おじさんが私を「仲間」と思ってくれたと思うとうれしくなり、毎日あいさつを続けるようになりました。

あいさつを通じて、たくさんの人と「仲間」になることができます。囲碁の試合中は敵だった人や、暗い雰囲気だった工事のおじさんも、あいさつをすることで、「仲間」になりました。多くの人、多くの場所であいさつをすることで、「仲間」がどんどん増えていきます。人と人が、「仲間」としてつながることで、犯罪や非行のない、明るい地域にすることができると思います。

私は、今後もあいさつを続け、色々なところで「仲間」を増やし、明るい社会をつくることに貢献していきたいと思いません。

★ ★
優秀賞

助け合う社会への道

目白小学校 5年生
かんのう ゆな
神農 由奈さん

私の住んでいるマンションに目の不自由なおじさんが住んでいる。家へ帰る道やエントランスのオートロックを解除する時に少し困っている様子をよく見かける。エレベーターは使わずいつも階段で上り下りする。いつも何かできることはないかと考えるけれどなかなかうまく声をかけることができない。

先日、電車に乗って、たまたま座っていた。目的地に着いて立ち上がった時、前にいた女の人が妊婦さんであることに気付いた。女の人是不満そうに、すれ違いざま一言二言文句を言っていた。もっと早く声をかけてくれたら席をゆずることができたのに少し腹が立ったし、後悔もした。地方新聞の記事をインターネットで読んでみると、迷子の小学生や帰り道のわからなくなったお年寄りを助けた人達の記事をよく目にするけれど、記事に対してのコメントは「むやみに声をかけると不審者に間違われそうで自分にはできそうにない」というコメントばかりだった。人と助け合ったり、ゆずり合ったりする

ことは意外とむずかしいことなのかもしれないと思った。

そんな話を家族にしたら、以前住んでいた長野では毎日みんな当たり前のように助け合っているのだと言われた。雪道のわだちで車が立ち往生してしまったら、近所の家のインターホンをならし、道具をかりやすい。母は道を通りがかったとき道をたずねるお年寄りを目的地までよく乗せてあげていたそう。父が単身赴任でいなかった時、わたしが救急車で運ばれるときもどこからともなく救急車の音を聞きつけて近所の人達が手伝いに来てくれたそう。助け合うことが当たり前のように思っているのだと思った。

困っている人に当たり前の手を差しのべられて、困っている人は遠慮なく声をかけることができることがもっともっと普通になればいいと思った。それからはマンションに住むおじさんとも少し話をするようになったし、駅の乗り換えで困った時に周りの人や駅員さんに声をかけやすくなった。いつも少し緊張感のある東京がやさしい街に思えるようになっ

た。マタニティーマークや助けが必要な人のためのマークがあることは知っていたけれど、最近をよく目にとまるようになった。困っていたら声をかけて欲しい人のためのマークもあるのだと知った。人が助け合えるための工夫がいろいろとあるのだ。もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思った。

学校では知らない人とは話さない、目を合わせてはいけないと指導されているし、人と人との結びつきが細くなっているようにも感じる。身を守る上では大切なことなのかもしれない。それでも私は人の優しさを信じられる人間でありたいと思う。東京オリンピックやパラリンピックのボランティアの人達、大会に参加した人達の笑顔が今も目に焼き付いている。助け合いはする側もされる側も笑顔にする。

私はこれからも助け合いの心を大切にしていきたい。そして、助け合いの輪を広げていきたい。私達が大人になったときには、行き交う人達は笑顔であいさつを交わして、誰でも安心して生活できる街になってほしいと思う。



ベスト受賞作品

中学生の部

552
作品

★★
常任委員長賞

未来を生きる人達へ

千登世橋中学校 1年生

よしだ ことね
吉田 琴音さん



私が考える「明るい社会」とは、皆の権利や人権が当たり前を守られ、笑顔でいられるような社会のことです。しかし、今のままでは私の目指す明るい社会の実現には繋がらないと思っています。

その一つの例として、町中での障害者との関わり方や、障害者に対する環境が整っていないということです。障害者の中には普通に読み書きできない人もいます。私達とはぜんぜんちがう視点で世界を生きているのだと思います。この前、テレビで障害者に優しくしている人を見て、私もこんな人になりたいと思いました。しかし、世の中はテレビで見たような優しい人ばかりではないと思います。視覚障害者の人にとって大事な白杖を邪魔な扱いをする人がいると知りました。視覚障害者の人達は沢山の苦しみを経験して今を生きているのに、その苦しみも知らずに邪魔をしている人がいると考えると、強い怒りを感じます。

そんなハンディキャップを負った人と健常者がお互いに安心して暮らせるには、沢山の努力と沢山の人の理解と協力が必要だと思います。

まず、障害を知らない人達に障害の大変さを知ってもらうために機会を設けることで障害者の味方を増やせば、明るい社会にグッと近づくとします。そして、知るだけでなく実際に行動に移すことです。行動するというのは少し難しいかもしれないけど、友達や家族、学校や住んでいる地域の人達と

協力して、ポスターを作ったり、見回りに行ったりすることで。言葉にするのは簡単で、実現するには、沢山の時間が必要だと思います。

障害者の問題だけでなく、外国から来た人達に対してや、社会的に立場の弱い人達が活躍できる場を設けることも大切です。外国から来た人達にはその人達なりの考え方があるし、日本の人達にも日本人なりの考え方があるのをお互いに知って、その上でどうするかが重要なポイントです。そして、私達の一番身近にある問題として、「いじめ」があります。私は、殴る蹴るなど目に見える傷の他に、言葉による見えない傷があるのを知っています。どんな方法であっても人を傷つけることがあってはならないのです。

私は集団からいじめを受けたことがあります。「なぜ私をいじめるのだろう?何か悪いこと、したかな?」と悩んだり、自分では間違ったことはしていないのに、なぜ責められるのかと落ち込んだりしました。

そんな時、環境が変わり、自分を受け入れてくれる人と出会って、いじめる側は仲間が多くなると、どんどん気持ちが大きくなって、理由などなくても嫌がることをしてしまうことを教えてもらい、仲間が増えれば増えるほどエスカレートして、どんな悪いことでもできてしまうのだということに気付きました。

今、中学校生活を送る中で、集団で一人をいじめるような

ことは起きていません。実は見えていないだけで誰かが苦しんでいる可能性も十分に考えられます。時々、私の友達に、いじめの加害者や被害者がいたら…とってしまうことはありませんか。いじめっ子やいじめられっ子にもそれぞれ良い点があるので、人として全否定することは間違っていると思います。それぞれの考え方、持っている長所短所は違うので、それを認め合うことがいじめを減らす第一歩だと考えます。分かり合うことは難しいけれど、時間をかけて互いの違いを認める努力を継続していくことがとても重要だと思います。

このように、一人ひとりがいじめについて真剣に考え、自分の発する言葉や行動にもっと責任を持つようになれば、それが一つのクラスだけではなく一つの学年で、一つの学校でいじめがなくなることに繋がります。これをあらゆる学校で広めていけば、まずは学校がよくなり、その生徒が大人になれば明るい社会が実現するのではないのでしょうか。

ここまでのことから、私達中学生は、人との違いがあることを認める練習や、自分とは考えの異なる人の立場になってその気持ちを想像する力をつけることが必要だと思っています。また、共感する力、我慢をする練習も必要で、これらのことを継続して身につけていくプログラムを作って、時間をもってそれを実践することが重要なのではないのでしょうか。

犯罪を犯したり、非行に走ったりする前に、小学校や中学校でいじめを無くすためのこういったプログラム実践していけば、非行率を下げ、社会に出たときに犯罪に手を染めることも事前に防げるのではないかと、考えるようになりました。そうすれば、少しずつ明るい社会が現実のものになってくるのだと思います。

★★
優秀賞

お礼の言葉

西池袋中学校 2年生

いしかわ ひなこ
石川 陽奈子さん

「ありがとう」

この言葉、心を込めて言っていますか。私は今まで心を込めて言っていることは少なかったと思います。そのことに気がついたのは春休みのことでした。

その日は、友達と遊ぶ日で、一緒に映画を見に行く予定でした。少し急ぎ足で待ち合わせ場所まで行っていると、知らないおばあさんから話しかけられました。

「ごめんね、お嬢ちゃん。駅まで行きたいのだけど道が全く分からなくて、おしえてくれますか。」

私はこの言葉を言われた時、一瞬急いでいるからと言って断ろうかと思いました。少し面倒だったというのも正直な理

由です。しかし、本当に困ってそうなおばあさんの顔を見て、仕方なく道を教え、途中まで一緒に行きました。待ち合わせには遅れましたがおばあさんの心の込もったたくさんのお礼の言葉と、道が分かった時の安堵の顔を見ると、とても嬉しくなり、一瞬でもためらったことに少し後悔しました。それと同時に親や友達にありがとうと言ったとき、そこまで嬉しくなさそうだったことや、心の込もっていない、素っ気なくありがとうと言われたときにそこまで嬉しくならなかったことを思い出しました。そして、もしかしら私は、今まで心を込めず口だけでお礼を言っていたのかもしれないとそのとき初めて気がつきました。これからは心を込めて、相手に感謝の

気持ちを伝えるようにお礼を言ったり、どんなに小さなことでもお礼の言葉を忘れないように心がけようと思います。そして、今回会ったおばあさんのような、意識せずに気がついたらお礼の言葉が口から出ているような人になりたいと思っています。

感謝の気持ちは、物やインターネットなどで伝えるのも一つの手かもしれません。しかし、結局は実際に会って言う言葉が一番相手に伝わり、相手に響くと私は思います。また、心を込めて口にするのと相手も自分も損することはありません。今の時代、インターネットで簡単にお礼を伝えることが出来ると思います。しかし、相手のためにも、自分のためにもたまには心を込めて身近な人にお礼を言ってみるのはどうですか。「ありがとう」が、たくさんの人に心を込めて言ってもらえることを願っています。

★★
優秀賞

大きな木

西池袋中学校 2年生

きくち りん
菊池 凜音さん

社会は大木だ。木というのは地下深くに丈夫な根を張り巡らして幹、葉、花、実ができてゆく。それら全てで木だ。社会も似ている仕組みになっている。「個人」が根底にあってその先に家庭、職場・学校、地域などがあり、その全てを「社会」と呼ぶ。だが、それは健康な木であって、根が丈夫でなければ倒れる、あるいは枯れる。社会の木も個人の根が丈夫でなければすぐに倒木となってしまう。つまり、個人が明るくなければ社会は明るくはならない。ではどうすれば個人が明るくなるのか。

私が小学校6年生の時のこと。世の中は新型コロナウイルスの感染拡大で外出自粛を余儀なくされた。学校もオンライン配信、マスクの着用は当たり前。当時の私は自粛生活に疲れ、とうとう心身に影響が及んだ。そんなときに常に寄り添ってくれたのが家族だった。病院への付き添い、カウンセリングの予約。そういった目に見える形のケアだけでなく、目に

見えない心のケアまで徹底してくれた。笑顔の絶えない雰囲気作り、体調のすぐれない時は体を摩って落ち着かせてくれた。こんなにも家族はチカラになるものだと思えて感じた。

寄り添ってくれること。これこそが明るくなる理由で先ほどの問題の答だ。「今、社会は明るいか」と問われても、胸を張ってイエスサインは出せないのが現状だろう。だから、寄り添ってほしい。こんな今だからこそ、そばにいてほしい。助けを必要としている人に。また、それが当たり前な世の中であってほしい。私が家族に助けられたように以降はその人の家族、いや「加族」となって隣にいたい。家に族さなくてもいいのだ。要救助者の社会に加わって手を取り合うべきだと思う。

では要救助者とはどのような人だろう。

いじめっ子と呼ばれる人がいる。その人は暴言・暴力とい

た過激な攻撃、無視や陰口といった陰湿な攻撃、あるいは両方の攻撃をターゲットに向けて振ってくる。したがって、いじめっ子はいわば加害者に当たる。実際にそういった人からの刃で傷つけられてしまった人、被害者がいる。このようなケースだと多くの場合が被害者のサポートを手厚くされる。もちろん心身に危害が加えられたのだから当然だ。しかし、これでは問題は解決されない。なぜなら、加害者には何らかの理由や動機があってその行為に行き着いたのかもしれない。または、無意識のうちだったかもしれない。だからその加害者らの悩み・わだかまりといった部分を改善してあげないと今後また同じようなトラブルが起きてしまう。つまり、加害者は被害者であり要救助者ということになる。

非行に走ってしまったから、罪を犯してしまったから。そういう理由で軽蔑するのではなく一人の人としてSOSに気づいてほしい。そして何より寄り添ってあげてほしい。それは一番近くにいたあなたの方だからできるはずだ。

社会を明るくするには、
「寄り添うこと」
私はこれを強く訴えたい。
社会の木が大樹となるように。



「間違い見直しノート」

高松小学校 6年生 しまもと 嶋本 か のん 花音さん



道徳の時間に先生から、「犯罪を犯してしまった人が立ち直るには、どうしたら良いか。」という話を聞いて私が真っ先に思ったのは、勉強していることです。私が間違えた箇所を消しゴムで消して書き直していると、いつも父に「消しちゃダメ」と叱られます。でも私は、間違えたところを無かったことにしたくてつい毎回消してしまいます。父は、「間違いは、間違いとして残しておき、二度と同じミスをしなないように、どこで間違っただのかを分析して、反省することがとても大切なんだよ。」と教えてくれました。そう言われてから私は「間違い見直しノート」を作り、大きな間違いをした問題をコピーし貼り次に解くときに間違えないためにはどこに注意すればよいかを書くようになりました。犯罪を犯してしまったこと、問題を間違えてしまったことは、まったく違います両方とも間違いなので犯罪を犯してしまった人も同じように刑務所の中で自分の罪を分析し、もう二度としないと深く反省していると思います。だから、刑務所から出てきたからといって私たちは、差別のない対応をとらなければ犯罪を犯した人が再び社会の一員に戻ることが難しくなると思います。立ち直ろうとする人を受け入れなければその人がいくら真面目に頑張っているでも味方がいなければあきらめてしまい、社会が嫌いになり、きっと再犯をしてしまうと思います。

そもそも「差別のない対応とは、具体的にどのようなことなのだろうか？」私なら犯罪を犯してしまった人が取り残されていたならば1回犯罪を犯してしまったことを反省しているので、忘れてあげてあいさつをしたり、声をかけてあげようと思います。なぜなら犯罪を犯してしまった人が、ひとりのままだと、

味方に相談できずに一人で悩んでしまい犯罪をくり返すかもしれないからです。

さらには、声をかけるだけではなく、一生懸命取り組める何かにさそってあげる必要があると思います。人間は、一生懸命取り組むと他のことが考えられなくなるので、犯罪をしようと思わなくなるからです。

では、なぜ差別をしてしまうのだろうか？理由は二つ考えられます。一つ目は、その人をこわいと感じてしまうからです。いつ、また犯罪をするか分からないのでその人のことを信頼できず不安な気持ちになります。

二つ目は、その人と一緒にされるのが嫌だからです。その人と一緒にいると、自分が犯罪者の仲間だと誤解されてしまい自分も差別されてしまう心配があります。

一つ目の信頼できないのに対しては、まずその人と話をすることが大切だと思います。話をして相手がどのような人かを知って、初めて相手を信頼することができると思います。私も知らない人と話すときは最初は不安な気持ちでドキドキしますが、勇気を持って話しかけると実際は話しやすい人だと気づくことがあります。

二つ目に関してはそうした差別をなくするために一部の人がだけでなく多くの人が理解し、協力し合う必要があると思います。そのためには、まず最初に気づいた人が周りの人に呼びかけ、広めていったり、小学生だと道徳の時間などでみんなでそのことについて考えて話し合うことで不安な気持ちを持っているのが自分だけではないと気づき安心して取り組むことができると思います。

このようにして、差別のない対応をとれば犯罪を犯してしまった人が社会に戻りやすくなり、またそれだけではなくももとの犯罪少なくなり明るい社会ができると思います。



「サイン」に気づいて

西池袋中学校 2年生 なかにし ま ひろ 中西 真優さん

あなたには大切にしたい人はいますか。私には友達が沢山いる訳ではありません。ですが、辛い時一緒にいてくれる家族や親友、部活動と一緒に頑張りたい友達や先輩、後輩、沢山お世話になった先生など一生大切にしたい人達です。きっとあなたにもいると思います。もし今いなかったとしてもそんな人ができた時、あなたはどのように大切にしていきたいですか。あなたの大切な人が辛い時、不安な時、悩んでいる時、あなたはその「サイン」に気がついていますか。大切な人を助けたくてもその「サイン」に気づけなくては助けられません。では大切な人の出す「サイン」にどうすれば気がつけるでしょう。

私は中学生になり初めはとても不安でした。人見知りだったので友達が作れるか、クラスに馴染めるか心配していました。ですが部活が決まり同じ部活でクラスも同じ友達が一人できました。その子は友達も多く、明るくて優しく、とても頭のいい子で学級委員をしている子で「こんなに完璧な子と私なんか友達で良いのか」と思うほどでした。ですがその子の明るさと優しさのおかげで私は1年間でその子ととても仲良くなることができました。私が悩んでいる時、相談にのってくれたり、分からない問題があった時、優しく教えてくれたりなど私にとってとても心強く、一番尊敬できる親友になりました。2年生になりクラスが離れてもその気持ちは変わることはありませんでした。そんなある日、その子が1年生の時学級委員が辛くて悩んでいたことを知りました。私はとても驚きました。なぜなら、その子は一度も私の前で辛そ

うな素振りを見せたことが無かったからです。私は毎日のようにその子と一緒に過ごしていました。それにいつも沢山話していて、私はその子に色々な相談もしていたのに私はその子が悩んでいたことに気づいてあげられていなかったことに気づきとても後悔しました。その子が悩んでいたことに気づいていたら、相談にのっていたら、助けられていたら良かったのと思いました。どうしていたらその子が悩んでいたことに気づいてあげられたでしょうか。私は毎日その子と一緒に過ごす中でその子が少し落ち込んでいた日や、口数がいつもより少ない日、元気がない日があったことを思い出しました。心や体が疲れている時、辛い時、悩んでいる時は誰だって元気を出して振る舞うのは大変ですよ。そんないつもと違う異変は悩んでいる「サイン」だったのだと思います。なので今後もしもその「サイン」を目にしたら「どうした？」や「何かあった？」、「大丈夫？」とたずねてみることにしました。

みなさんはどうですか。周りの大切な人が悩んでいるとき、辛いとき、その「サイン」に気がついているのでしょうか。もしもあなたの周りの大切な人が悩んでいる時や、辛い時に大切な人の異変や、元気がないこと、落ち込んでいるような「サイン」に気がつくとするとそれはきっと周りにいる人だけだと思います。その少しの「サイン」に気がついたとしたらあなたもその大切な人に「何かあった？」、「大丈夫？」とたずねてみてください。一言そなたずねるだけでも大切な人を大切にすることにつながるはずですよ。



《“社会を明るくする運動”とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全・安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。

《豊島区推進委員会の活動》

社会を明るくする運動豊島区推進委員会では、例年7月の強調月間を中心に各団体の協力のもと、様々な趣向を凝らしたPR活動を実施しています。

また、「いのち」「社会を明るくする運動」をテーマに募集した作文コンテストには、豊島区立の小中学校の児童・生徒の皆さんからたくさんのお応募をいただきました。

《中央大会「区民のつどい」》

7月3日(日)に帝京平成大学沖永記念ホールで中央大会「区民のつどい」を実施しました。第一部では作文コンテスト表彰式と推進委員長賞・常任委員長賞の作品発表を行いました。第二部では映画上映会を行い、山田洋次監督の「十五才 学校Ⅳ」を上映しました。

地区優良賞 受賞作品 地区優良賞は、応募者の中から、学校ごとに1名ずつ選出しています。

学校名	受賞者氏名	作品名
仰高小学校	高橋 彰也	いじめなどはいけない
駒込小学校	濱口 航希	人間は、立派な理性の持ち主である
清和小学校	徐 聖雄	不思議ないのちの大切さ
西巣鴨小学校	穂本 溜嘉	社会を明るくするために…
豊成小学校	伊藤 晴	孤独な人をなくすためには…
朋有小学校	山上 莉桜	「身近な言葉の重さ」
朝日小学校	佐藤 和	自殺や暴力がなくなる世界を
池袋第三小学校	藤嶋 優也	つながりは地域へ、国へ、世界へ
南池袋小学校	関根 由衣	相手に気持ちを伝えるには…
高南小学校	清水 理咲	明るい社会、今自分たちでできること
目白小学校	内島 康幹	人にやさしくすること
長崎小学校	加藤 希実	「私と命」
要小学校	石原 さら	人の命を大切に
椎名町小学校	二階堂 史乃	かけがえないもの
富士見台小学校	太田 紗楽	感謝をすることの大切さ
高松小学校	土居 優佳	仲間を想う心と勇気
さくら小学校	三上 さくら	いのちをつなぐ出逢いのバトン

学校名	受賞者氏名	作品名
駒込中学校	植木 彩乃	いじめ
巣鴨北中学校	橋本 琉花	「命」に恵まれた私達
西巣鴨中学校	黒崎 琴羽	「人間と動物が関わり合う世界」
西池袋中学校	才田 涙衣	少しずつの努力
千登世橋中学校	鷹取 采希	言葉と命

“社会を明るくする運動”豊島区推進委員会 (50音順)

警視庁(巣鴨署・池袋署・目白署・巣鴨少年センター)、東京商工会議所豊島支部、東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会、豊島区、豊島区環境衛生協会、豊島区教育委員会、豊島区更生保護女性会、豊島区商店街連合会、豊島区青少年育成委員会連合会、豊島区町会連合会、豊島区BBS会、豊島区保護観察協会、豊島区保護司会、豊島区民生委員児童委員協議会、豊島区立小学校PTA連合会、豊島区立中学校PTA連合会